

# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 佐々木 あや乃



学位申請者 村山 木乃実

論文名 アリー・シャリーアティーの神秘主義思想に関する宗教学的研究  
—西洋との出会いから生まれたイラン的イスラーム—

## 結論

村山木乃実氏より提出された学位請求論文「アリー・シャリーアティーの神秘主義思想に関する宗教学的研究—西洋との出会いから生まれたイラン的イスラーム—」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は全員一致で博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は佐々木を主査に、副査として本学の水野善文教授、東京大学の鎌田繁名誉教授、名古屋外国語大学の松山洋平准教授、そして主任指導教員の八木久美子教授の5名によって構成された。

## 論文の概要

本論文は、近年再評価がなされている、イランの知識人アリー・シャリーアティー(1933-77)の思想を、彼の文学作品群「沙漠論」に注目し、彼が神秘主義に見出した可能性の分析を通じて、総合的に評価することを目的としたものである。従来1979年のイラン革命への貢献者と見做されてきたシャリーアティーの思想の再評価の動きが進む中で、本研究は、シャリーアティーが自己に向けて執筆した「沙漠論」を研究の中心に据え、シャリーアティーの神秘主義理解に肉迫したうえで、それと「沙漠論」の関連性の分析により、シャリーアティーの神秘主義の捉え方が彼のシーア派改革思想にいかに関係しているかを明らかにした、優れた論文である。

本論文は、大きく「序論」、「本論」、「結論」に分けられており、まず序論では、シャリーアティーとイラン革命、シーア派、シャリーアティーの著作について簡単に触れた後、「イラン革命とアリー・シャリーアティー」では、シャリーアティーの生きたパフラヴィー朝下のイランを概観し、シャリーアティーがいかにしてイラン革命の立役者となったかを述べている。続いて「先行研究のまとめと本稿の特徴」では、シャリーアティーに関わる研究と「沙漠論」研究の潮流が整理され、そこから①「沙漠論」にみられるシャリーアティーの思想は何か、②「沙漠論」とシャリーアティーのシーア派改革思想との関係性は何か、という先行研究上の2つの問いが提示されている。

続く本論は、第1章：生涯と作品、第2章：シャリーアティーの「エルファーン」、第3章：「沙漠論」、第4章：自己への語りから構成される。

第1章「生涯と作品」では、シャリーアティーの作品を読み解くうえで必要な作業として、シャリーアティーの生涯が「幼少期から大学入学まで」、「マシュハド大学時代」、「フランス留学時代」、「帰国からホセイニーイエ・エルシャード閉鎖まで」、「逮捕から客死まで」の5つに分けられ、概観されている。

その結果、世俗化が進むイラン社会の中で、シャリーアティーは生涯を通して、民衆による社会変革を目指し、シーア派イスラームこそがイラン人たちを救済し、社会を正しい方向に導くことができると考えていた、ということが明らかにされた。また、フランス留学を経て打ち出された「アリーのシーア派主義」は、シャリーアティーのそれまでの知識と経験の結実であり、シャリーアティーはこれこそがイラン人のために必要なイスラームとして提示したものの、イスラームと西洋思想が複雑に絡み合った彼の思想は同時代のイラン社会では理解されず、シャリーアティーは社会で孤独な存在であったことが浮き彫りにされている。

第2章「シャリーアティーの「エルファーン」」では、シャリーアティーが理解する神秘主義「エルファーン」の検討がされている。シャリーアティーは神秘主義に人間のあらゆる活動の源泉を見出し、それがシャリーアティーの思想に新たな息吹をもたらしたという。

村山氏は、シャリーアティーの「エルファーン」の形成には、「近代的神秘主義」とイスラーム神秘主義の影響が認められ、彼は「エルファーン」に自らが直面する問題すべてを解決できる鍵を見出したと明示している。普遍性とイラン文化の固有性の両方に根差すことが可能で、元来言葉にすることが不可能でありながら、伝統的なペルシア神秘主義文学の力によって表現できるものは、「エルファーン」しかありえないとシャリーアティーは考えていたのである。

第3章「沙漠論」では、「沙漠論」を構成する4作品、『沙漠』、『降下』、『独白』、『親しい友人たちとの対話』を概観する。シャリーアティーの思想的軌跡が表れた『沙漠論』で展開される彼の思想や主張は、他の著作や講演にも通底するものの、「沙漠論」が他の著作や講演と決定的に異なるのは、そこにシャリーアティーによる自らに向けた語りが見られることである。「沙漠論」の基調を成す自己への語りは、シャリーアティーの神秘主義の捉え方が見事に表された結果であると村山氏は分析している。

イラン社会で誰からも理解されることのなかったシャリーアティーが、この世界に耐えきれない感覚に突き動かされ、自身に対して語らずにはいられなくなる。その語りが音楽性を帯びたペルシア語である。本章で、村山氏はシャリーアティーの言語芸術に対する評価の確固たる証左を見出している。

第3章の考察を踏まえた第4章「自己への語り」では、シャリーアティーの自らに向け

た語りの特徴の分析が行われ、以下の4点が明らかとなる。

1. 「沙漠論」にみられるシャリーアティーの自己に向けた語りは、ペルシア神秘主義文学に支えられている。
2. 「沙漠論」で表現されている2つの孤独、すなわち神との別離から生じる孤独と、シャリーアティーがイラン社会で抱えていた孤独は、彼の自らに向けた語りの中で重なり合う。これゆえに、シャリーアティーはイマーム・アリーへの孤独への真なる理解に至ることが可能となった。よって、「沙漠論」は既存のシーア派の法学・神学の知の体系を突き破る、シャリーアティーのシーア派思想の土壌であった。
3. シャリーアティーによる孤独に対する積極的な意味づけは、神と人間の近さを証明するまでに広がりを持つ。シャリーアティーは、自らが作り出したシャーンデルという人物に託して、神の孤独さ、その孤独ゆえの天地創造と人類創造を語る。そして、この東洋的世界観が、実は東西を問わず人類共通であると示唆する。
4. 民衆の感情に訴えかけた『沙漠』と『降下』は、「アリーのシーア派主義」の社会実現のために必要不可欠な、民衆との一体化のための手段として位置づけることができる。言葉による分断を解消し、民衆を奮い立たせることのできる手段として、シャリーアティーは豊かな詩の伝統をもつペルシア文学に希望を見出した。

結論では、シャリーアティーが、神秘主義に人間の行動全ての根源を見出し、彼が神秘主義を理解しようと精神的に格闘する中で、深く自己を見つめ直し、人々を動かす「イデオロギー」をも見出したとする。「沙漠論」には、シャリーアティーが神秘主義によって獲得した境地が言語芸術という衣を纏って表現されている。それと同時に、その「沙漠論」は、シャリーアティーが分裂してしまいそうな自己に調和をもたらし、統合するための場でもあったことが指摘されている。革命のイデオログとされながらも孤独で厭世的な思想家とされたシャリーアティーの「沙漠論」は、シャリーアティーの精神的格闘の場であり、その格闘を支え、彼の思想を統合へと導いたものこそが彼独自の「エルファーン」であったと結論づけられている。

#### 審査の概要及び評価

審査は2021年12月3日13時より2時間弱おこなわれた。最初に村山氏より本論文の内容について20分程度説明があり、続いて各審査委員から質問や助言が寄せられた。高く評価された点は次の通りである。

- ・イラン革命との関係という文脈でシャリーアティーを捉える試みはこれまで多くなされてきたものの、本論文はシャリーアティーという人物の内面に分け入り、その思想を読み解こうとする点においてその独自性がある点。
- ・孤独という概念を中心に据え、人間の霊性に基づく哲学的議論を、文学テキストの分析を通して行うという意欲的な試みであり、今後さまざまな広がり期待させる論文である

点。

・これまででない新しい光をシャリーアティーに当てた点、すなわちイスラームの少数派であるシーア派の世界で、さらに宗教的文脈においては周縁的な位置に置かれた、世俗的教育背景をもつ知識人の宗教思想を同時代の社会的背景に照らしながら分析した点。

各委員と村山氏との間の質疑応答は、以下の通りである。

・論文のタイトルの一部である「宗教学的的研究」の意味するところは何かという問いに対し、村山氏からは、これまでのシャリーアティー研究は政治的な文脈で論じたものか、あるいは彼の文学作品のみを対象とした文学的分析のいずれかであったのに対し、本論考ではシャリーアティーの文学作品を分析対象にしつつ、イランの人々を突き動かすような力を持つ宗教思想を再構築しようとした彼の足跡を明らかにしようとしたこと、さらには彼の思想がイスラームの枠を超え、宗教一般の可能性にまで至ることを示唆しようとしたという説明があった。

・シャリーアティーは革命のイデオログであるという趣旨の記述があるが、現実に革命を主導したのも、革命後の体制を理論的に整えたのもモッラー（ウラマー）であったことと矛盾するのではないかという問いに対し、村山氏からは、シャリーアティーは革命の成功を見ずして死去しており、厳密には彼の貢献は革命への道筋を拓いたことに留まり、革命の成功及びその後の体制は必ずしも彼の理論に基づくものではないこと、その意味において政治思想としての彼のシーア派論は未完であるとの回答があった。

・論文で繰り返し使われている「イラン的」という用語が果たして必要なのか。敢えて用いられていることの理由を問われると、村山氏からは、シャリーアティーの思想はシーア派イスラームの土壌から誕生したものであると同時に、イスラーム以前に遡るペルシアの土壌に由来することも重要な意味を持つため、この語を用いたという説明がなされた。

・シャリーアティーは仏教に対してかなりの関心を示しているが、彼がどのようにして仏教を学んだのか、イランでは仏教についてどの程度知られているかという問いに対しては、定かな証拠はないものの、シャリーアティーは留学先のフランスで、世界の多様な宗教について紹介する一般書を読む機会に恵まれ、それによって知識を得たと考えられるという、客観的観察に基づく見解が述べられた。

また、各委員から指摘された点は次の通りである。

・本論文では一貫してシャリーアティーの「エルファーン」（イスラーム神秘主義、神秘思想）の独自性が訴えられているが、存在の哲学と連関させる点において、究極的には伝統的な学問的エルファーン理解と繋がっている可能性がある。今後この点について考察を深めると、さらなる議論の発展があるのではないか。

・シャリーアティーの思想とペルシア文学との有機的関係が、イラン社会における詩の伝統や位置づけ、詩の豊かさを知らない人間にとってはわかりにくい。この点に関してはよ

り詳細な記述が必要である。

・（楽園からの）「降下」、（神に近づくことなくこの現世・世俗に）「留まること」などの表現が繰り返し使われているが、これらが一体として意味を持つこと、つまりそれらは人間が本来的にもつ剥奪感・喪失感を述べていると同時に、神から離れることで初めて人間が人間として果たすべき役割を果たすことができるという、シャリーアティーの見解をも表明している点について、より明確に議論されてもよかった。

・周囲の人間に理解されず、シャリーアティーが孤独であったことが強調されているが、最終的には彼の思想が革命の起爆剤になったこと、さらには今日に至るまで時代を代表する思想家として認められていることは、規模の大小を問わず彼の周辺になんらかの思想的サークルがあったはずであり、その中での議論についても今後検討すべきではないか。

・シャリーアティーの格調高いペルシア語の詩的散文作品を翻訳するにあたっては、一語一語の意味するところをじっくりと理解し、訳語を熟考して味わいのある和訳を生み出そうとする姿勢をもつことが望ましい。

最終試験における質疑応答における申請者の回答や説明は的確であり、委員たちとの間で有意義なやりとりがなされた。この質疑応答を通して、指摘された問題点を申請者が自覚し、今後助言を生かしつつ問題の解明をおこなうために十分な意欲と学識、高い研究能力を有することが確認された。本論文の出版を目指し、さらにはシャリーアティーの思想的後継者と評され、イラン知識人内で絶大な人気を誇るアブドル・キャリム・ソルーシュ氏(1945-)の研究への意欲を持つ、申請者の今後に大いに期待したい。

審査委員会は、学位請求論文の内容ならびに最終試験（公開審査）の結果より総合的に検討した結果、全員一致で申請者村山木乃実氏の学位請求論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。